

「校長たより」にアクセスいただいた皆様

「校長たより」にアクセスしていただき、ありがとうございます。今回は、次の4つを掲載いたしました。

①きらっと光る子どもたちの生の声

○一人一人の思い ～10/19(土)城ヶ丘ふれあいフェスティバルの振り返りから～

○同世代間での学び ～10/15(火)稲刈り体験学習より～

②キラッと輝くエピソード

○若手から学ぶ ～教育実習生の姿や実習ノートから～

○さすが、最高学年！ ～中学部3年生の修学旅行から～

③本校の教育活動

○思いやり週間の、その先を目指しましょう！

○「待てる支援者」になりませんか？

○日頃の感謝の気持ちを缶バッジに込めて ～10/30(水)後援会にて～

④お耳を拝借

○令和7年度の学校経営方針案について ○書籍の紹介

お読みいただき、本校の教育活動にご理解いただくとともに、ご指導ご助言いただきますようよろしくお願い申し上げます。

校長 上松 武

令和6年11月11日



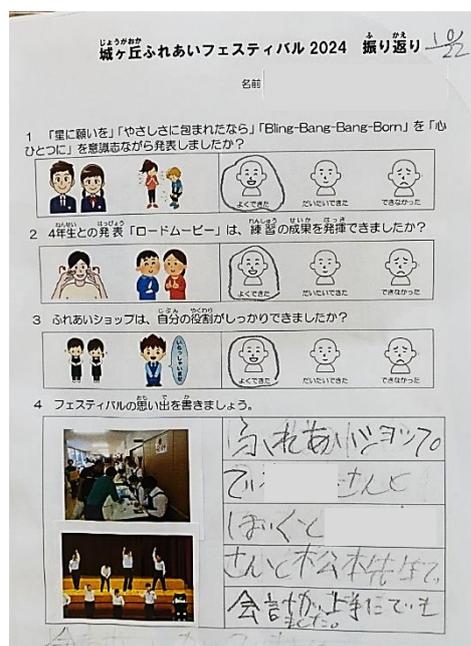
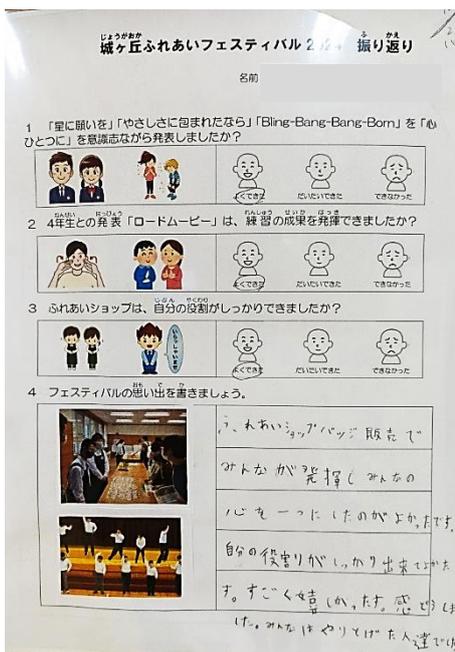
チームふれあい 27人の先生方へ  
「なかよく たのしく たくましく」生きる  
子どもの育成を目指して⑮ -11111 校長たより-  
～自分のできることで、まわりの人を笑顔にしよう！幸せにしよう！～



上松 武

1 きらっと光る子どもたちの生の声

○一人一人の思い ～10/19(土)城ヶ丘ふれあいフェスティバルの振り返りから～



- ・最高学年として取り組んだ、中学部3年生のふれあいフェスティバルの振り返りを読み、それぞれの思いが詰まったフェスティバルだったことをあらためて感じました。
- ・ステージ発表と同じくらい「ふれあいショップ」での販売に寄せる思いがあり、仲間と心を一つにし

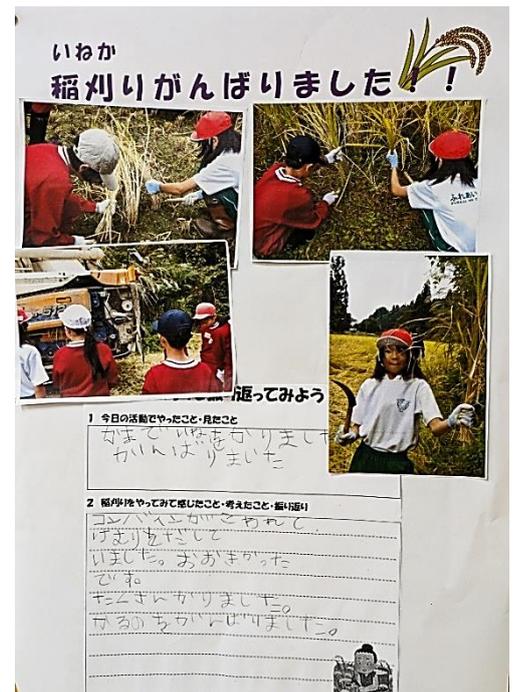
て販売し、自分の役割を果たせた充実感が文面や写真から伝わってきました。

- ・自分たちが日ごろの学習活動で一生懸命製作し、それを笑顔で購入してくださる販

売活動は、自信を高め自己有用感を向上させる大切な学びの場ですね。

### ○同世代間での学び ～10/15（火）稲刈り体験学習より～

- ・毎年両校の5年生が田植えをして、秋に稲刈りをしています。
- ・ふれあいの児童は1名の参加でしたが、帰校すると、すぐに体験したことをたくさん話してくれました。
- ・田植えをした稲の成長ぶりや稲刈りの大変さなどを身をもって学習できたと思います。
- ・さらに、同世代（同学年）と一緒に同じ学習ができることも、本校のよさです。田植えや稲刈りの体験とともに、「植える」「収穫する」「食べる」など5年生の教科の内容を学ぶことにも主眼を置いて取り組んでいきたいです。



## 2 きらっと輝くエピソード

### ○若手から学ぶ ～教育実習生の姿や実習ノートから～

- ・10月11日（金）から10月25日（金）までの期間、渡邊悠希さんが教育実習を行いました。
- ・生徒とのかかわりや先生方とコミュニケーションをとっている姿から爽やかさと誠実さを感じました。生徒たちと良好な関係を築き、子どもたちにとっても渡邊さんにとっても学びの多い期間だったと思っています。
- ・実習ノートから印象的だった内容をいくつか紹介します。

#### □4日目

生徒一人一人が自分の役割を理解し、自分の課題と向き合おうとしている姿が多くありました。他の生徒との比較ではなく、自分の成長に重点を置いていることは特別支援学校の特色の一つだと思いました。生徒の能力を最大限に引き出し、支援し過ぎない支援も大切だと考えました。

#### □実習全体の振り返りより

子どもとの向き合い方を多く学びました。子どもは素直な子が多く、まっすぐな子どもが多くいました。そんな子どもと関わる中で正しいことを伝えなくてはいけない、間違っことは伝えられないと心から思いました。

- ・私は核心をついていると感心しました。他の生徒との比較ではないこと、正しいことを教え導く使命が私たちにはあること、子どもたちを信頼し子どもたちに期待すること。渡邊さんの姿から大切なことを学びました。先生方と再度確認しながら子どもたちの前に立とうと思います。

### ○さずが、最高学年！ ～中学部3年生の修学旅行から～

- ・10月31日（木）～11月1日（金）の一泊二日で渋川伊香保方面へ行ってきました。天候に恵まれ、記憶に残る修学旅行となったと思います。
- ・この二日間を通して、私が感じたことを解散式で子どもたちに伝えました。

それが次の3点です。

①あいさつがすばらしい。

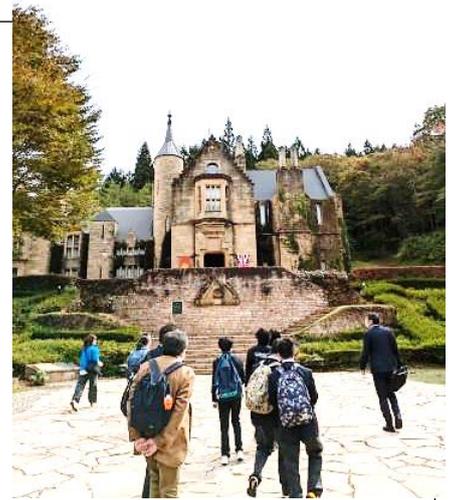
見学先や旅館など行く先々で自分たちから「こんにちは」と元気よくあいさつをしていました。挨拶された人たちは笑顔になります。笑顔になることでその後のやりとりがスムーズになりますし、良好な関係を築けます。あいさつの意味を子どもたちから教わりました。

②はきものをそろえる。

スリッパや外履きの靴を脱ぎ履きすることが多くありました。いつも履きやすいように向きを変えてくれていました。粋な心遣いができるものだな～と感心しました。

③「〇〇へ行ってきます」のひと言がうれしい。

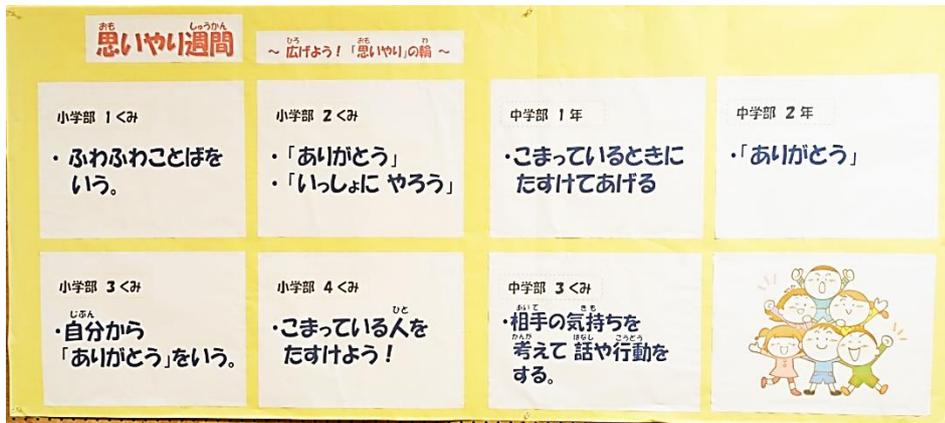
集団で行動しているため、一人一人の所在がはっきりしていないと困ります。その点、中3の皆さんは先生方に行先や用件を伝えてから集団から離れます。とても安心して活動を進めることができました。



### 3 本校の教育活動

#### (1) 授業改善

○思いやり週間の、その先を目指しましょう！



- ・10月24日(木)～10月30日(水)の一週間、思いやり週間を設定し各学級で決めた目標に向かって取り組みました。
- ・「思いやりとは」と考えると難しいの

ですが、上の各学級の目標のようにどんな行動をするといいか考えて実践することで、「思いやり」を理解していくと思います。

- ・各学級の目標を達成しようと行動することにより、**仲間とのかかわりがスムーズ**になります。そして、**学習集団の成長**につながっていきます。
- ・今よりもよい集団になっていくことで、**お互いを高め合おうとする雰囲気**が生まれ、自分でできることが増えたり、できることに磨きがかかったりして、自信が深まっていくと考えられます。
- ・本校は、学級単位や学部全体、あるいは〇〇班というように学習集団を柔軟に編成して教育活動に取り組んでいます。だからこそ、この「思いやり週間」の取組は貴重であり、学習集団をより成熟した集団に成長させていくと考えています。

○「待てる支援者」になりませんか？

- ・担当している子どもが、買ってきてほしいと頼まれた品物がどこにあるのか見つ

けらず困っています。ちなみに、この子どもはお金の種類や支払い方法、見当たらない場合の対応の仕方はすでに学んでいます。

- ・あなたはどちらの対応をしますか。

①すぐに支援する

例)「ここにあるよ」「どうするんだっけ」「店員さんに聞いてみたら」などと声を掛ける

②すぐに支援せず見守る

例)『見当たらないときの対応、忘れたのかな?』『どのくらいまで見守もろうかな?』『このままだったら、いつ働き掛けようかな?』などと想像する

- ・私たち大人は、子どもたちの可能性を信じて指導・支援に当たらなければならないと思っていますし、そうでなければ子どもたちの自立と社会参加は難しいと考えています。
- ・もっと子どもを信頼して、『あなたなら、できるよ。間違えたっていいから、自分で考えて行動してごらん』と愛情をもって期待しながら待つほしい。そうしないと、いつまでたっても、本校の子どもたちに自信は育たないと思いませんか。すぐに支援してしまうような対応では、私たちが自信の芽を摘んでしまっていることとなり、自分でやろうという気持ちは育たしません。
- ・だから、今よりも「待てる支援者」になっていきませんか。

## (2) 認知度改善

### ○日頃の感謝の気持ちを缶バッジに込めて ～10/30 後援会にて～



- ・本校の後援会は令和元年7月に発足し、共生社会の実現につながる活動を多方面から支援していただいています。
- ・昨年度末時点で、233の団体や個人の方から会の趣旨に賛同してくださり、たくさんのご厚情をいただきました。
- ・昨年度、一昨年度と職業基礎の缶バッジ班で必要不可欠な「カラープリンター」と「缶バッジマシン」を購入することができました。
- ・「いつも支えてくださる方々に恩返しを」といろいろ考え、十日町市や津南町の魅力を伝える缶バッジを贈ることにしました。
- ・後援会当日、森本会長様に代表生徒が缶バッジをお渡ししました。缶バッジを手にした役員の方々は「きれいだね!」や「ここはどこだね?」と関心を寄せてくださいました。
- ・「してもらおう」ことが多い子どもたちがこのように感謝や思いなどを伝える機会をもっと作り出し、子どもたちの「がんばり」や「一生懸命な姿」を伝えていきたいと思っています。

## 4 お耳を拝借!!

### (1) 令和7年度の学校経営方針案について

- ・大きな変更はありません。これまでの学校経営方針を継続していきます。

・特に力を入れていきたいことは、次の2点です。

- ①自信をもって、分かって動ける子どもを育成するため、職員自らが「待つ支援者」へ自己変革していこう。
- ②本校の子どもたちと交流校の子どもたちの「相手を思う心」を育成するため、同世代間交流を実のある活動にしていこう。

## (2) 書籍の紹介



### 町工場の星 諏訪貴子著 日経 BP

東京・大田区の町工場、ダイヤ精機の諏訪貴子社長の新刊。「ゲージ」と呼ばれる測定具や金型部品などの製造を手がけるダイヤ精機は、ミクロン単位の金属加工技術で国内トップクラスの存在。創業社長である父親が急逝した後、主婦から2代目に就任した諏訪さんは、幾度となく訪れた危機を乗り越え、「人が辞めない最強の職人集団」をつくり上げた。その手腕が評価され、岸田政権「新しい資本主義実現会議」の委員に選ばれるなど、中小企業を代表する経営者として注目を集める。今回の著作では、32歳で社長になった後、自らが理想とする「ザ・町工場」をどうつくり上げてきたか、20年間の多彩なエピソードで綴る。人材の採用・育成、社員との濃密なコミュニケーションなど、他の中小企業にとって参考になる内容が満載。  
(Amazon ホームページから)